



入選

## 花狐

野瀬町  
水沢 郁

井上 次雄  
木村 泰崇  
選

で新長瀬在住者が町内会長を務めるようにもなっていた。こんなことで旧長瀬の村の者は、世の推移を「時代やなあ」と身近に実感するのだった。

「京都の人ということですか。何かこの辺の昔話ちゅうか、先祖の過去のことを調べたいということ、私にもよう分からんのですが、生きてはつたらオヨシちゅう人に会うてもみたいということだ」

町内会長は誰も本気で相手にしないような、ちよつと面倒くさい話を肩書ゆえに自分に振られたということ、みじんも気配に出すことなく、穏やかに語りだした。その職にふさわしい、いい人柄だった。

「前会長に相談しましたところ、親爺に聞いてみるわということ、耳と記憶が遠くなりつつあるお父さまから、どうやらお宅のお母さまのことではないか、ということになったのです」

「えらい、突然ですなあ」

夕飯の途中だったので、口をもぐもぐさせながら、私は一応の話を聞いてみた。

話というのは、四十年近く前、この村に「任んで」いた男の甥の、その娘に当たる女性、その大伯父の、ここでの生活ぶりについて聞きたいということだった。その男が残した書き付けの中に、私の母のことがちらつと出てくるらしい。

「分かりました。母に聞いてみて、何か分りましたら返事します。その方の連絡先を教えてください」

渡されたメモには「梨田阿蘭」という名前と携帯の番号が記されてあった。

今度は私が、毫碌の始まっている母の体調と精神状態を考慮しつつ、「梨田」氏（後で阿蘭から下の名前は「六郎」というのだと聞いた）の思い出を聞き出すという作業だ。

近い過去のこととはまだらになつていてというのに、母の数十年前の過去は、ときに鮮明に彼女の海馬に貼り付いていた。

総合するに次のような話だった。言われてみれば私もその男の記憶は少しあるが、母の話を元にその頃のことを、いろいろふくらませ、物語仕立てで次に書き記す。

六郎はロクロハンと呼ばれていた。村人の誰も、ロクロハンの戸籍上の本名は知ら

オヨシというのは、私の母のことである。「よし子」という親のつけた名前はあったが、一昔二昔三昔、このあたりがまだ農村地帯であった頃、そういう愛称は、村内で十分通用し、何がしかの発展家にいたっては近郷にもその名を知る人がいた。戦後の昭和まった中の頃だった。

何か深い事情があるのか酔狂なのか、とにかくその頃のことを聞きたがっている人がいるということで、長瀬の町内会長が、母の都合を聞きに来た。知らない名字だった。昔は六十軒ほどの集落だった長瀬の名字といえは三つくらいで、それがここ数十年、長瀬地区の田んぼに次々と団地が造成され、長瀬の人口は増え続け、そんな関係

なかつた。

この男、犬神川のきつね橋の下に住む。

片田舎でルンペン稼業をしている男は、その節珍しく、好奇と少しばかりの嫌厭の目で見られるのは免れないが、ロクロハンは生来お人好しだった。ために善良の仮面の下に潜む田舎人の警戒心をときほぐす術にすぐれ、というより、人々に愛されていた。

ロクロハンみたいになつたら、あかんで。

ロクロハンみたいに極楽とんぼになれたらなあ。使い分けられてはいたが、要するに村人の気休め。村人の慈悲心にもよく恵まれ、ロクロハンはルンペンのわりには血色よかつた。

ロクロハンの愛車は年代物の実用自転車。

何でも伊勢湾台風のときに、きつね橋の橋梁に流れ着いてひっかかっていたものという。持ち主が名乗り出ぬまま二十数年、ロクロハンの手入れのたまもの、昔の物は何でも頑丈やつたと、村人の嫉妬にも似た賞賛、ロクロハン知ってか知らないでか、新聞売りよろしく近在の村々に朝な夕な現れる。

市域の膨張に伴い市に編入される以前のその昔、福寿村と呼ばれていた地域にあるのがきつね橋、したがってロクロハンは、きつね橋の近在の、福寿の小字に出没するが、現住所、すなわちきつね橋は佐和市長

瀬町のはずれ、長瀬の人々に一等顔なじみであつた。

長瀬は小さな在所であるが、洪水のような勢いで宅地化が進む旧福寿村のなかで、エアポケットのたんぼや畑地、竹藪、雑木林をかなり残していた。だから、絶滅危惧種のごときロクロハンが命脈を保てたのかもしれない。

ロクロハンは、日の出とともに起きだし、朝の空気を存分に身にみなぎらせて長瀬の農地を巡回する。まるで田の神である。

年寄り連中が鳥とともに耕地に出向き、ついで壮年や子ども面々がそれぞれの職場や学校に出かけるのが長瀬の朝、ロクロハンが順練りに顔を合す相手はいつたいに若返る。たんびに相手の反応にお構いなく、「おうよ」、「おうよ」と健在を示すあいさつ、住民も馴れたもの。世代によって異なるものの親愛を込めて、いなしている。

ときにロクロハン、マイカーを駆つて出勤まぎわの男に近寄り、「お前、ゆがんだぞ」男は窓を下げ、ロクロハン見やり怪訝な表情、「ゆがんだるがな、知らんのかいな」顎をしゃくって示した所を見れば、そこにはとんでもない方向が映つていた。「後ろもよう見て走りや」もちろんバックミラーなどないロクロハン号はそれだけ告げるとのろのろと歩み出す。そんなこともあつた。

長年の信用である。軽作業など村人の仕事の手伝いをして、子どもの小遣い程度の施しを受けたりして食いっぱぐれはしていなかつたようであるが、ロクロハンは基本的に物貰いであつた。ロクロハンの朝食は、若い者が労働に行く前に畑で一仕事する、おもに老女たちが調達していた。朝の畑での立ち話でごく自然に施しを受け、それがちつとも卑屈ではなく、しかもロクロハンはその場で食すなどという見苦しいまねはけつしてしなかつた。

ロクロハン、六十をゆうに超えた年になると、もちろんそんなことはなく、もとは佐和の町中の呉服屋の倅で、遠い先祖は武家に入りして商いをしていたとか。同じ乞食でも、ロクロハンの、どこか実直で多少の自負を感じさせる雰囲気は、そこらあたり由来するのであろう。父祖の代から佐和の旧城下へ下肥取りに出向いていた長瀬の古老たちは事情を承知、ロクロハンが恒産を放棄し、いつしかきつね橋を拠点に長瀬の半住民になつても、土地から排除しようとするほどの警戒心と違和感はなかつた。

では、なぜ、彼が無業となり少々変わった生活をしようになつたのかだが、これも噂の域を出ぬこと、しかし、噂の根拠となる事実として、ミンダナオ島の部隊の中

で奇跡的に生き残り、敗戦の混乱の中、息子まちわびるはずの我が家に復員したところ、あろうことか、こんな田舎町への気まぐれなB29の空爆がロクロハン宅近辺にあり、すでに家族を失っていた、ということがあった。

ロクロハンの世捨てはそれから数年たつて始まった、らしい。

ロクロハンの住みかの地主あるいは管理責任者は国か県か市か知らないが、竹藪の中のきつね橋の掛け替えが予定されているわけでもなく、過去に、行政から立ち退くようにとの指導勧告を受けたことはあったのだろうが、強制執行には至っておらぬ。

ロクロハンの存在は行政手続き上わずらわしいが、毒にも薬にもならぬのである。

ロクロハンが長瀬の半住人になって三十年以上になるが、いつ頃からか、実質的にはその四分の三になっており、というのは実はロクロハン、冬場はせいたくにも避寒しているらしく、末弟が京都におり、彼のはからいで風雪をしのいでいるらしかった。新嘗祭は勤労感謝の日に変じたが、その勤労感謝の日あたりから、翌年の、文字どおり啓蟄の頃までがロクロハンの冬ごもりである。本場に陽気とともに、ロクロハンは福寿郷に現れる。その、いわば年中行事が長らく続いている。何もそんな手の込んだ

生活をせずとも、福寿に、長瀬に、特別な因縁のあるうはずもないのであるが、そこがまた、ロクロハンのわからぬところであった。

さて、そのロクロハンが、いつものように長瀬に舞い戻って再びきつね橋の旧居を足がかりに気ままな生活を送り始めて一月あまり、ある日、忽然と彼はいなくなった。

「平成」と墨書された色紙がテレビ画面に大写しされた年だった。

四月中旬、桜の葉が花の末練を断ち切るように濃緑に繁茂するころ、長瀬周辺は菜の花の黄色と、休耕田を利用した市の「レンゲいっぱい運動」とやらで、目にも鮮やかな色舞台となる。そんな陽春の午後であった。

レンゲ田で寝ころび、頬杖をついて、往来や遠くの山並みを眺めているのであろうと思われるロクロハンの姿が見かけられた。

ロクロハンの行方不明事件、今もって彼は行方不明なのであるから、事件と言っては未解決なのである。それはともかく、この事件には伏線があった。というのは、ロクロハンが長瀬から消えたことに深い関わりがあると思われる動物、長瀬、いや福寿のような片田舎にはついぞ姿を見せたことのないキツネ。そのけたたましい鳴き声が夜な夜な聞かれ、それらしき小動物

の姿が夜隠に乗じて出没するという珍事が、数年前からたびたび起こるようになっていたのだった。

キツネは夜行性であろうから、それまで目撃されなかっただけかもしれない。また、もとの生息地が、開発という名のもとに破壊され、比較的自然環境が豊かな福寿郷まで、犬神川の河辺林に沿って下ってきたのかもしれない。

理由はどうあれ、オトギバナシの世界ではコンコンと鳴くはずの、キツネのギャオギャオという発声は当初、謎に包まれ、気味悪がられていた。しかし、誰言うことなくキツネではなからうかということになり、そう言われてみるとそれはそう、ゴングンと聞けた。

ロクロハンが消えてなくなる日の白昼、レンゲ田で物憂げに頬づえをついていたロクロハンの、右脇あたりに確かに動物、それも黄土色の毛並みの生き物が潜んでいたという。仲よしの二人という印象だった。

ロクロハンの動静など誰もちくいち気にしているわけではない。長瀬近辺をなわばりにしているカラスと同様、いなくなればいなくなったで、いなくなったことに気づく程度である。

しかし、その日のロクロハンの居場所がいつになく変わったところであり、その

ところに気づき、留意した者があつた。オヨシさんである。オヨシさんは持参したおにぎりをロクロハンと一緒にほおばったり、夏場はご丁寧にも、きつね橋の下まで蚊取り線香の差し入れに行ったりする人であつた。虫が知らせたというか、何か胸騒ぎを覚えるものがあつたのか、オヨシさんは、「どうしたんやいなあ、そんなとこで」と犬神川の支流の小川の土手道から、ロクロハンに声をかけたという。そしてそのとき、彼女は彼に寄り添う動物を確かに見たというのだ。しかし、次の瞬間、すなわち、ロクロハンがやおら半身を起こし「おうよ」と答えた時には、黄金色の毛並みであつたはずの、その生き物は見あたらなくなつていた、というのだ。この件について、村の者は、誰もオヨシさんの言を信じない。オヨシさんは我を張る人ではない。そのため、強弁する人でもない。

したがって、ロクロハンの存在が長瀬で確認されぬ今となつては、オヨシさんの目撃は、オヨシさんの目のサツカクというかたちで、永久にあの時のレンゲ田に封じ込められてしまつたのである。

しかし、オヨシさんは近しい友人に語る。「わしはなあ、あの時ロクロハンを見かけて、すぐには声をかけなんだんや。なんや、その横で、もぞもぞちらちら動くもんがある。

それは確かにキツネやつた。そのキツネめの頭をロクロハンはやさしう撫でてやつてるんやがな。キツネめも、遠目やけどとろーんとした目つきでぼーつととる。わしも見てるうちに気持ちよくなつてしばらく声もかけられんとそのまま見てた。さかさま川（犬神川の支流）の土手には菜種の花、その向こうのげんげ（レンゲ）田にキツネとロクロハンや。キツネは別にしても、そんな景色普段見慣れているわしでも、その日は絵本みたいにきれいやつた。ほんで、しばらく眺めてたのやが、ロクロハンの様子がちいとおかしい思たんや。なんでて言われてもよう分からんのやが、なんやげんげ田に融けていくような気がしてなあ。ほんで、どうしたんやいなあ、ちゆうて声かけたんや。そしたらなあ、キツネめが、もわもわと大きなつてロクロハンに乗りかかるように見えてふいと消えたんや。わしもくらつときてなあ。あれつと思たら、げんげ田で身を起こしたロクロハンが、おうよ、言うたんや」

「何してるんやいなあ」とオヨシさんは再び問いかけた。

「ロクロハンが起きあがつた時には、もうキツネめはおらんようになってなあ。おかしいな思たけど、何や聞くのも悪い気がちよつとしたし、その時は目の錯覚やる思

てあんまり気にもせなんだ」

「花見してるんや」嬉しそうにロクロハン は答える。

「花見、て、桜は散つてしもてるし、第一、近くに桜なんかあらへん。あ、そうか、げんげや菜種の花やなあ思て、綺麗やなあ、言うた」

「ほんま、綺麗や。ここにいてるとな、花の海に潜つてるみたいやで」

「そうかあ、綺麗やろなあ言うたが、花の海とはロクロハンもうまいこと言うなあ、思うて、ほんでも溺れたらあかんで言うて冗談言うたんや」

「ここやつたら、溺れても苦しいない。ちよつと、竜宮にでも行つてこうかなあ」とロクロハンも軽口をたたく。

「あはは、阿呆言うて」

「こんなやりとりの後、二人は別れる。いや、オヨシさんはその場を立ち去つた、というのである。」

別れ際、ゴンとロクロハンの鳴く声がした、云々のオチもあつたりしたが、これは、オヨシさんの話を漏れ聞いた誰かのおどけた創作であろう。

これが、ロクロハンの蒸発の顛末なのであるが、その後のうわさ話は数々あつた。

キツネにたばかられて、今頃どこかの在所をうろついているのであろうとか、あの

年代物の実用自転車が駅前には置きっぱなしに放置してあったからやはり出奔したのであろう、そう思うと、うきつね橋下の旧居はきれいに整理整頓されてあったとか、無責任な話が村人の会話のついでに流されたりし、いやいや戦後何十年も経つてしまし、思うところあつて、戦災で肉親を失つた不幸な復員兵士としての自分にひと通りの区切りをつけたのではないかなどという、人の来歴を勝手におもんばかった、それでいて、ずいぶん良心的で感傷的な解釈もあつたりした。

かなり精度の高い情報としては、長瀬の町内会長宛に、京都の弟から礼状が届いたというのがあつた。また、ロクロハンの住まいの横の竹藪の中にキツネの巣穴があつたのを福寿中学の理科の先生が発見したというのもあつた。しかし、いずれも誰もまともに確かめようとはしなかつた。ロクロハンの行方はもちろん少しは気にはなるが、老人会長の右足骨折の原因だとか、ゲンさんの若嫁が姑と合わず、息子はとうとうどこかで家を購入して長瀬から出ていったとか、そういった話の方が現実味があるのである。とにかく、ロクロハンの件は浮いていた。近くで身元不明の死人が出たとか、警察がロクロハンのことで村にやつてきたとか、そんな騒動もない。

やはり、ロクロハンは最後にゴンと鳴い

た、としておくか。行方は杳として知れない。

「大伯父は案外、風流人です。短歌や俳句めいたもの、遺稿というか書き付けが残されていましてね」

黒のスキニーパンツと桜色の七分袖ブルオーバー姿の梨田阿蘭は、話し始めるや初対面の私に対して、自然な笑みを浮かべた。大学四年生ということであつた。そのわりにはしつとりとした落ち着きのある、聡明そうな切れ長の目元である。

前述したような情報しかないが、それでもいいかと連絡したところ、それでいい、お忙しいのにこんなことで時間を割いていただいて申し訳ないということで、駅前のビジネスホテルの喫茶店で顔を合わせるこゝになつたのだ。

「日記みたいなものもありましてね。そこにお宅のお母様のお名前がありましたものですから、ぶしつけを顧みず……」

「母に直接会つて何か聞きますか」  
「いや、いいんです。大叔父とのつながりが確認できただけで十分です」

なら、電話だけでもよかつたのではないかと、私が少々いぶかしく思つたのを察したのであろう。

「あのう、長瀬にきつね橋つてありますよ

ね。どんな橋ですか。一度、見ておきたい」

「はい、旧福寿村域には、犬神川にかかる橋が四つあつて、かみから、国道橋、おまの橋、福寿橋、一番しもがきつね橋です。長瀬町域にあるのは確か、福寿橋ときつね橋、だつたかな。県道の交通量が非常に多くなり、そのため県道にかかる福寿橋は立派に掛け替えられ、きつね橋を利用する人はほとんどいません」

「行つてみたいんです。ご足労ついでに、ずうずうしいのですが、ご案内いただけますか」

彼が残した数々の草稿の中に「れんげさうにほひゆかしきながむくろながせのはしのもとにぞおかむ」という歌があるのでさうだ。私はそのとき阿蘭から、耳でそう聞いたのだが、書かれている文字も仮名だといふ。

「稚拙な短歌でしょ。むくろなんてちよつと不吉だし……」

言つてから、阿蘭は恥ずかしそうにうつむいた。

「いやなかなかのものですよ。素人では作れません」

実際、そう思つたから、私はそう言つた。

「そうですか。ありがとうございます。大叔父は六郎という名前ですが、長兄なんで

す。一番下の弟、つまり私の祖父ですが、子供の頃、遠縁に当たる京都の親戚に養子に出され、戦時中の不幸や何やかやで、六郎の親兄弟は祖父を残して次々亡くなりました。そうして今は結局、係累はここを離れていた弟の息子、六郎にとりましては甥にあたる、私の父だけということになりました。二十年ほど前になりました。父は二十八歳という若さで、晩年の彼を梨田の家に引き取ったんです。祖父の残した遺産も少しございまして・・・」

母から聞いた話の一部とつじつまが合うので、私は安心したというのか、ホウとため息をついてしまった。父方のルーツを訪ねに来たのかと思うと、目の前にいる阿蘭という女性が、殊勝な女の子に思えた。

「で、六郎さんゆかりの橋の下を一度見ておこうと・・・」

私は失礼なことを言ったような気もしたが、数十年前の話だ。

「ええ、でも・・・六郎は、あの歌で、なぜ『きつね橋』とせずして『ながせの橋』としたのかなど。もちろん『長瀬の橋』ということなんでしょうが、『長瀬橋』という言い方はないですよね」

「長瀬の橋ねえ・・・なんの言われもないと思いますかねえ。当然のことながら歌枕でもなんでもありませんし」

次いで「大学では国文学専攻ですか」と口元まで出かかったが、阿蘭は、視野の狭い思い込みや感傷に浸るような思慮が浅い女性ではないと思えていたので、私は黙っていた。

「大伯父は、棟続きでしたが、離れのような我が家の一室で過ごし、私が小学校三年生の頃、八十歳で亡くなりました。生き方の割には長命だと思えます。私の祖父は、私が生まれる以前、大伯父が我が家にやってくる二、三年前に亡くなりました。で、私は物心ついてから九つときまで、大伯父にずいぶん可愛がってもらいました。私はじいちゃんじいちゃんと言っては部屋に上がりこみ、いろんなお話を聞いて育ってきたのです。大げさに言えば薫陶を受けたのです」

「長瀬の話も、いろいろと。」

「ええ。でも、それは話の端々からうかがい知れるという程度でした。話のほとんどは、後になって考えてみれば、こんなこと言うの恥ずかしいのですが・・・物語の話や、短歌、俳句、文学的な話でした」

だから「ながせ」の詮索かと、私は思った。

「高校に上がるくらいから、遺稿も興味深く読み始めました。おかしいとお思いなさるでしょう。作家でもなんでもないのにな。」

変なじいさんの書き残した物なんか・・・そんな私を父も笑っていました。でも、父にしたって、伯父の生き方に何かリスベクトめいたものを感じていたからこそ、引き取ったのだと思います。祖父を亡くしていたせいもあるとは思いますが」

陽は中天に差ししかかっているようであった。外を見ると光がまっすぐ降りてきている。

「何か食べますか。それからご案内しましょう。何もありませんよ。車で七、八分」

「ええ」

食事は遠慮すると思ったのだが、阿蘭は勧めに従った。飾らないおくゆかしさが感じられた。サンドウィッチをつまみながらの話は、ややくだけたものになったが、とりとめのないものだった。食後、彼女は私の申し出を笑顔でしりぞけ、自分の分をきちんと支払い、外に出た。そして私の車を待っている。薄手のトレンチコートは羽織らず、手にしたままだ。

土手道の脇に駐車し、竹藪の中を少し下ったところから、きつね橋の下に向かった。竹林を抜け、イネ科の雑草が腰のあたりまであるところを漕いでいく。コンクリートの側壁とテトラポットが水流を隔てていた。水音がかすかになり、そこに着いた。

「どうです。本当に何も無いところでしょ」

「ええ、橋だけですなえ」

「たぶん、ここだと思えます。かつての住居跡は、台風や大水のたびに流れは変わっていると思いますが、橋の位置は変わっていません」

阿蘭はハンカチを取りだし、橋の直下から離れた明るいところに腰を下ろした。私も座る。見渡すと、ほとんどが雑草の繁茂する原っぱだが、小石や砂の川原の脇に、涼やかな川の流れがある。ときおり小鮎の銀鱗が日に光る。長い髪をかき上げ、彼女はこうつぶやいた。

「六郎はたぶん、ここでキツネと暮らしていたことがあったと思います」

場所がきつね橋だし、母の話の最後にはキツネと一体となった六郎が登場していた。だから、いずれこんな話題も出てくるとは思っていたが、それにしても不意をつかれる直球だった。

「どうしてそう思うの」

思いがけずこんな言い方をしてしまったが、実際、彼女は私の息子と孫の間の年齢だった。

「長瀬でのキツネとの交遊ぶりを詩にしたものや随想ふうの文章の最後に、まるで、反歌のようなこんな句がメモしてあったのです。『乞食（こつじき）の犬抱いて

寝るしも夜哉』（許六）<sup>きよろく</sup>。許六というのは、

芭蕉の流れを汲む江戸時代の俳人です。・

これは、いくらなんでも、そうとは言えないから、六郎は犬に仮託しているだけであつて・」

「ふーむ」私は返しようがなかった。

「小学校に上がる前だったから、五つか六つのおときだったと思います。こんなことがありました。夜中にかすかに人の話し声が流れてくるような気がして目を覚ました私が、寝床を抜け出したことがありました。

いつもは川の字に寝てくれる両親が、そのとき傍にいたのかどうか、記憶にありません。二人とも未明に帰宅したような気がします。で、見ると、廊下の先がぼうっと明らんでいて、やはりボソボソと人の声がする」

「六郎さんですか」

「はい、大叔父の部屋からでした。二人なんです。女の人の声。静いようである、睦言のような。ねえ、お前さん、というなまめかしい声ももれてきました。私は聞いてはいけないような気がしました。見てもいけない・・なんだか、怪談嚙に出てきそうな作り話のようですが、障子の格子四つ分くらいに二人の上半身が影絵のように浮かび上がっていて。怖くなった私は慌てて寝室にもどり布団にもぐりこみました。話

し声はしばらく続いていたようですが、最後はクインとかなんだか、子犬が鳴くのをなだめられたみたいなため息が廊下づたいに私の幼い耳に流れ込んできました。私はその気配から逃れるように再び眠りにおちいりました」

「それが女狐だと・」

「そう思います」

彼女は断言した。

「子どもの頃、それも、自己と自己を取り巻く世界が不分明な時期って、幻影のような思い出がよくあると思います。私のそのときの体験もそのたぐいかもしれませんが、でも、翌朝、確かに次の日の朝、大伯父の部屋の前の廊下にわずかに残った動物の足跡と枯れ松葉のような抜け毛を私は見逃しませんでした。夕べの不思議を大伯父からそれとなく聞き出そうと部屋に向いたときのことです。大伯父はいつになく早い散歩に出っていました。私は大伯父のけがらわしい秘密を見せつけられたような気がして、足跡らしきものを靴下でねじり拭き、黄土色の毛をつまんで庭に埋めました。うちでは犬なんか飼っていませんでした。このことは、大伯父にはもちろん、母や父にも今にいたるまで内緒にしています」

「なんとなく分かるような気がするよ。感受性が鋭すぎたんだよね」

「・・・そのもやもやしていた謎が、後年、大伯父の遺したノートを見て解けた、という事です」

阿蘭は笑みを浮かべている。その視線の先で、小魚をねらう白鷺をとらえている。

「乞食が抱いて寝た、っていう？」

「当夜、知りあいの女性が来られていただけかも知れませんがね・・・高齡の六郎が女性といかがわしい行為をすることもないだろうし」

いかがわしい、という言葉が若い女の中に生きていることに驚き、私はあらためて阿蘭の横顔をつくづく眺めた。と、それを振り払うように彼女は言った。

「今の私なら、許せますけどね」

横顔は恥ずかしげに笑っている。

「だから、こじつけかも知れませんが、『なかせ』は『汝が背』じゃないかと」

「・・・ながせのはしのもとにぞおかむ」

「ええ、ゼミの演習みたいですよみません」

やはり国文なんだと、私は納得した。

「大学では国文？」

「はいっ？・・・ええ、まあ・・・だから、

あれは六郎に懐いていたキツネがみまかつての、その挽歌なんじゃないかと。春の季節には特にあでやかだったお前、今でも心ひかれるが、この橋の下に埋葬するにしても、お前のことはいつまでも心の端に置い

ておくよ。そんな意味なんじゃないでしょうか。そして妻のようなキツネ亡き後、もう長瀬の土地にいる必要もなくなつて、父の申し出を受けて梨田の家に身を寄せるようになったんじゃないかと」

「一つのストーリーだね。じゃあ、あの晩の女狐は、その亡霊？」

「いえ、もう人間の女友たちでもいいです。

六郎は句会に入っていて、ご婦人方とのお付き合ひもありましたし・・・」

最後に絵文字の「笑い」が入るような口ぶりだった。

日は西に傾き、橋の下にも少し陽射しが入り込もうとしている。やつて来た方を大きく振り返つてみると、竹藪の中に紛れ込んだような一本の椿の木が目に入った。それまで気づかなかつたが、相当な大木だ。おそらくロクロハンの頃からあつたのだろう。もう今は周辺に見あたらないレンゲ畑。その名残をとどめているような鮮烈な赤紫がぼつぼつと灯っている。

「ありがたいございました。もう帰ります」

きつぱりと、阿蘭は言った。

「おじさんが、文学のこと分かる人でよかつた。自分勝手な思いこみと変な解釈ばかりに付き合わせちゃつて。すみません」

「いや、おもしろかつたよ。こんなことを言つてはなんだが、若い女の子とこんな会

話するの、初めてだ」

「辟易ですか？」

「いやいや、そんなことはない。六郎さんのことも、彼が愛したキツネのことも大人の童話みたいで、美しい話だつたよ」

阿蘭を駅まで送り、改札口付近のベンチでまた少し話し込んだ。二人とも、電車の時間を調べていなかった。何せ、ここらあたりのJRの電車は、三十分一本だ。

しばらくして、電車がもうすぐやつて来るとの構内アナウンスがあつた。

私と阿蘭の間に、少しく沈黙が流れた。それは気まぎれになつたからではなく、阿蘭が一呼吸置いた間が長かつたからだ。阿蘭はいきなりこう言った。

「六郎は自死したんです。」

「じし？」

私はすぐに「自死」と聞き取れなかつた。

「ええ、冷たくなつていたのは、文字通り凍てつくような冬の朝でした。そしてそれは、六郎が日ごとに老衰していつて、今後は寝たきりになるうかというタイミングでした。彼はそれまでデイサーピスを受けることも、施設に入ることも拒否していました。身の回りのことを自分でできるうちは、自分でしようと。その後のことをどうするか、決意していたフシがありました。後で



考えてみれば、ですけどね。彼はいつも穏やかな表情でしたし・・・」

「それまで、一人で生きてきたからねえ」  
私はごく当たり前のことを言っただけで、たよるが、とつさにいい言葉が浮かんでこなかったのだ。

「多量の睡眠薬を服用し、みずから一酸化炭素中毒を引き起こしたのです。部屋にはストーブもあるというのに、その冬は、懐かしいからと言って、納屋から古い火鉢を持ち出してきて、炭火に葉缶を掛けたりしていました」

「他人、いや、身内に迷惑かけたくなかったのだからねえ」

「そう思います。部屋には目張りがあり、火鉢からうまく一酸化炭素が出るように工夫してありました。あまりの潔さ、あつけなさに、父など、伯父さんは工作もできただねえ、なんて不謹慎なことを・・・今から十二年ほど前のことです」

再び案内アナウンスがあった。

「じゃ、また来ます」

阿蘭は少し目を伏せ、それから努めて明るい声を出した。お茶のペットボトルを振って、サヨナラをした。

「気を付けて。京都のどこまで」

「伏見稲荷の近く」

手に持った缶コーヒの先まで硬直した

私を見て、阿蘭は大笑いした。

「ウソですよ。北山の方」

「あんたこそキツネだ」私は苦笑するばかり。

「じゃあ、コンと言って帰りましょうかあ」

「はいはい」

「おじさん・・・」

ここで阿蘭はまた真顔になって、

「最後に、大伯父六郎の辞世、言っておきますから、覚えておいてね」

「知らずしてこの世に芽吹くものゆえにかでか知らん散りゆくまぎわ」

彼女はその歌を私に向けて繰り返し朗唱し、澄んだ笑顔を残して改札口を抜け、プラットホームに向かう階段に消えていった。

(評)

無職の放浪老人ロクロハンと女狐の不可思議な関係が、「私」の母の昔語りや老人身寄りの女学生の体験談を通してファンタジックに描かれる。挿入の許六の句、老人遺作の短歌がこの超自然的な恋仲を暗示する謎解きとして登場するところは秀逸である。

佳作

## 背広のオーバーコート

大藪町

外村輝夫

※特選は該当作品がありませんでした。



今回は五つの力作ありがとうございます。特に入選『花狐』は「評」に記したとおり秀作でしたが、特選とするには今ひとつ構成面で粗さが目立ち、素材が面白いだけにもつたいなかった。佳作はじめ他の四作品もご自身の実体験をベースに丁寧に描かれています。しかし忘れてならないのはこれは小説だということ。小説は創作で、創作は基本的に嘘です。皆さん、もっと嘘をついてください。自身の体験を素材にするのはオツケー。でも素材のままでは創作にあらず。どんなに美味しいお肉でも生で食べよと言われたらちよつと引きますよね。読み手はやはり料理してほしい。素材に味付けして美味しい料理に創り上げるのがペンの力です。芸人が「最近こんなことあつてさ」と、さも実体験であるかのように語るネタの大半は作り話つまり嘘です。嘘だから面白いのです。言いかえれば面白くなるように事実を曲げるからウケるのです。小説もまた同じ。創作の秘訣は上手な嘘にあり。見え見えの嘘なのに迫真の現実味。それこそが小説の目指すリアリティです。次回も皆さんの嘘で楽しませていただけることを期待しています。

井上 次雄

